

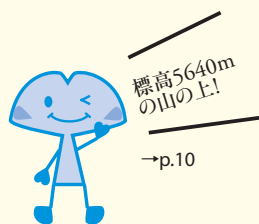
学内広報

2024.5.27

no.1582



東京大学アタカマ天文台 (TAO) 望遠鏡サイト



多様性包摂共創センター

IncluDE始動!

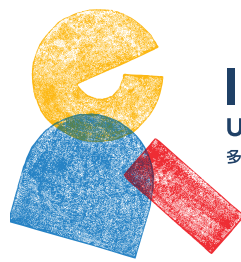
タスクフォース
新型コロナウイルス対策TFと
大学の4年間

DiversityとEquityとInclusionを推進する全学組織

IncluDE

多様性包摂共創センター

始動!



IncluDE
UTokyo
多様性包摂共創センター

4月に新設された多様性包摂共創センター（IncluDE）。男女共同参画室とバリアフリー支援室を統合し、ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン（DEI）を推進するための学内共同教育研究施設です。DEIの実践を担う二つのオフィスに、研究部門が加わりました。センター設置の目的や展望についてセンター長の伊藤たかね先生、副センター長の田野井慶太郎先生と松田雄二先生に話を聞きました。

最先端の研究と実践を結ぶ

——IncluDEの目的を教えてください。
伊藤 主な目的は二つあります。一つは、これまで別々に動いていたバリアフリー支援室と男女共同参画室が統合されることによって、今までできなかったことができるようになるということです。例えば、女性の障害者は、男性の障害者とは違う困難を抱えていることがあります*。交差性（intersectionality）といいます。二つの室が一緒になることでこういった問題を解決できるということ。また、二つの室は実践を行うところで、これまで研究の機能はありませんでした。そのため、学内で行われているDEIに関する最先端の研究が、必ずしも東大の中での支援につながっていないケースがありました。研究部門を設置することで、研究の成果を取り入れた支援を実現し、支援の現場でどういう困りごとがあるかを研究者にインプットするという双方向の動きをつくりたいと思います。研究部門に

は43名の先生方に兼務教員としてご参画いただいています。エンジニアリングから人文・社会科学系まで幅広い分野の先生方です。背景としてもっている研究の基盤などが全然違うと思うので、まずは互いが何を考えているか知る機会を作ることから始めようかと思っています。

松田 研究者の立場から言うと、多様性に関わるキャンパス整備と研究者の取り組みはそれぞれ別に行われていて、そこを組み合わせる仕組みが存在しませんでした。恐らく多くの知見をそれぞれの研究者がもっていると思うのですが、それを直接的にキャンパス改善、環境改善にフィードバックする回路は存在しなかった。そこで変わらなと思っています。

学外と連携して社会を変える

——産学官の連携はどのようなことを考えていますか？

伊藤 他大学との協力で具体的に進んでいるのは、東北大学、お茶の水女子大学と連携して開講した「ジェンダード・イ

ノベーション入門」という集中講義です。去年はトライアルとして、3大学の先生が中心になってオンライン授業を行い、計23名が参加しました。去年は本学では単位を出せませんでしたが、今年は出せるようにしたいと思います。男性が多い東大の学生にとっては女子大の学生と同じ立場で学び、意見交換するのは非常にいい機会だと思います。

田野井 産業界との連携も進めていきたいです。昨今、どの会社も、より良い人材を得るために、多様性や包摂性を重視してきていると聞きます。そういう面で、企業側も最新の情報を求めているので、共同研究など企業と一緒に取り組めることを増やしていきたいと考えています。東大は多様性という点で遅れをとっています。産業界の後押しもいただきながら変わっていかなくては、と思っています。——今後の取り組みなど教えてください。

伊藤 当事者評議会というものを作り、学外の当事者団体の方たちにアドバイザーのようなかたちでご意見をいただきました



(←) 山上会館で行われた開所式での集合写真。藤井輝夫総長、林香里理事、伊藤たかねセンター長やIncluDEの教員などが出席しました。
(→) IncluDEの研究部門に参画する兼務教員一覧。これ以外にも多くの教員がオフィス員として参加し、会議の出席や全学事業の審査等の業務を行っています。

研究部門参画教員

(2024年4月現在)

笠井清登	石原孝二	本田由紀	金道浩一
里村嘉弘	清水晶子	出口敦	熊谷晋一郎
宮本有紀	瀬地山 角	國吉康夫	近藤武夫
松田雄二	松田恭幸	二瓶美里	並木重宏
井口高志	矢口祐人	板津木綿子	綾屋紗月
小野仁美	四本裕子	KARLIN JASON GREGORY	吉本英樹
田野井慶太郎	浅井幸子	田中東子	山中俊治
松井彰彦	隠岐さや香	藤田結子	高野 明
山口慎太郎	小国喜弘	前田健太郎	横山広美
福永玄弥	額賀美紗子	武藤香織	長井志江
石垣琢磨	星加良司	永吉希久子	

*障害は個人ではなく社会の側にあるとする「障害の社会モデル」に基づいた表記を使っています。





いと考えています。学内外のつながりは共創推進戦略室が担当します。

松田 バリアフリーについては、トイレが喫緊の課題だと思っています。駒場キャンパス1号館改修時には、男女共用トイレの導入が検討されていますが、これは学生自治会からの強い要望を受けたものだと思っています。つまり、当事者学生のニーズがあるのです。しかし本郷ではほとんど訴求していません。バリアフリー支援室は当事者からの声があって、リアクションするというのが基本でした。これだと、今の環境だからキャンパスに来られないという人がいる場合はいつまでたっても変わりません。環境を先に変えていく必要もあると思います。そこがIncludEのなかで少し動きやすくなるのでは、と思っています。

田井 SOGI（性的指向と性自認）多様性は、これまでの男女共同参画に関する活動ではほとんど触れてこなかった分野でした。2月に公表されたSOGIに関するガイドラインを受けて、職員の方々もどのように対応すればいいかわからないこともあると思います。そういったニーズに応えるため、研修や意見交換の場の形成など、準備を進めています。

確実に変わった学内の意識

— 過去にもDEIに関する様々な取り組みがありました。変化は見られますか？

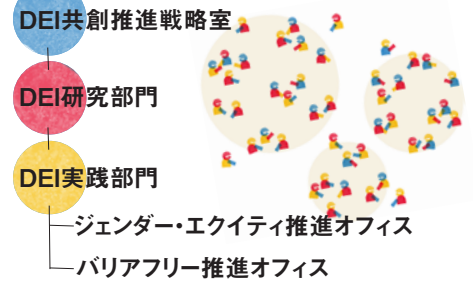
伊藤 大学の執行部だけでなく、部局の執行部の意識も確実に変わったと思います。林香里理事や吉江尚子副学長と一緒に取り組んでいる、女性教員を増やす

5カ年計画についてかなりの数の部局長の先生方と話してきました。計画の立案を始めた3年前は、「女性を採用する」というと「下駄をはかせるのか」という声すら聞こえることもありました。今はそのような発言は聞かれません。そのような雰囲気は確実に変わっていると思います。昨年度初めて実施した役員向けDEI研修の成果もあるかもしれませんが、「ダイバーシティのない組織は生き残れない」という社会全体の雰囲気や意識が浸透してきたと思います。課題は、それを一般の構成員にどう広げるかということです。

田井 藤井輝夫総長や相原博昭理事をはじめとする本学のリーダーたちが、さまざまな場面で東大の多様性の欠如を危惧する発言をされています。トップが発するそのようなメッセージの影響も大きく寄与していると思います。

松田 バリアフリーの面では、東大の建物に歴史的建造物が多いことが大きな制約になってきました。とはいえ耐震などのメンテナンスの際に改修しているので、かなり良くなってきていて、物理的なアクセスについては相当改善されています。ただ、外から分かりにくい障害やマイノリティ性などにはまだアクションが取れていない可能性があります。例えば、性的多様性や発達障害などです。環境を整えれば大学にも来られるようになり、落ち着けるという方もいらっしゃると思います。バリアフリー支援室がソフトの対応は手厚く行ってきましたが、ハード環境の面ではまだまだこれからなので、今後取り組んでいきたいと考えています。

IncludEの組織構成



IncludEには二つの部門と一つの室があります。ジェンダーや障害などDEIに関連する分野の研究者が集まる研究部門。バリアフリー推進オフィスとジェンダー・エクイティ推進オフィスが所属する実践部門。そしてこの研究と実践の両部門をつなぎ、IncludEを学内外の組織とつなぐのが共創推進戦略室です。ダイバーシティ推進課が事務を担います。

女性リーダー育成に向けた施策「UTokyo男女+協働改革#WeChange」プロジェクトPR動画より (<https://wechange.adm.u-tokyo.ac.jp/ja/movie/>)。大学構成員の意識改革や、2027年度までに着任する教授・准教授1200名中約300名を女性とすることを目指しています。



東大の障害のある学生や教職員、学生サポートスタッフが作成した東京大学アクセシビリティマップ（バリアフリーマップ）。エレベーターやバリアフリートイレ、段差、坂道、車いすの通行可否などが記されています。



2026年に完成予定のD&I棟（仮称）イメージ図。東京大学創立150周年記念事業の一環として、本郷キャンパスの第二食堂の隣に建設されます。IncludEはこの棟に入る予定です。



我々は感染症パンデミックにどう向き合ってきたのか？

タスクフォース

新型コロナウイルス対策TFと大学の4年間

2020年2月28日に設置された新型コロナウイルス対策タスクフォース（TF）が、2024年3月31日に解散しました。コロナ禍に悩まされた全学の構成員に指針を示し、感染防止と対応の司令塔であり続けてきたのがこのTFです。初期の段階からTFに携わり、第2代座長の重責を務めてきた前理事に、対処記録を見ながらこの4年を振り返っていただきました。



新型コロナウイルス対策
タスクフォース座長

大久保達也



「新型コロナ
ウイルス
対策 対処
記録」

体温と体調を入力して問題なければ構えるという体制を整えました。

2021年4月には、入学式がなかった学年のために歓迎式典を企画しました。学生思いの藤井輝夫総長の決断でしたが、日程発表後に感染者数が急増し、延期せざるを得ませんでした。批判もありましたが、式典を強行して感染者を増やすのは絶対に避けねば、と考えました。学部と大学院で8回も実施したのは人数制限の必要から。抗原定性検査を経て入場し、着席位置を記録する仕組みを整えたのは、DXの成果でした。

キャンパスでのワクチン接種は2021年7月が最初です。接種前の問診は医師免許がないとできません。保健センターを中心に、医師免許を持つ全学の先生方が問診を買って出てくれて、「チーム東大」を感じました。接種人数が読めなかったりといった困難もありましたが、本郷では延べ67,723人に接種を実施。学生、教職員、ご家族、近隣大学の学生も対象の一大プロジェクトでした。

封鎖を解くのが大変でした

2021年4月にTF座長を引き継ぐ際、任務はキャンパスを開けることだと福田先生に言われました。案の定、授業を対面に戻そうとすると、感染したら大学側は補償してくれるのか、と一部構成員から声が上がりました。特に人も授業も数が多い駒場では声が大きかったです。オンライン環境、電力供給、換気の強化も必要で、施設部、教育・学生支援部、環境安全衛生部が連携して対応しました。それらの業務の担当が全部私だったのは

結果的によかったかもしれません。対面活動復帰は他大に遅れ、マスコミの圧力も感じましたが、当時はデルタ株で重篤化する人も多く、慎重な対応が必要でした。ですが、ある晩秋の日、正門の外から身を乗り出すようにして色づいた銀杏並木を撮る人を見て、地域のためにも開けようと思えたことを覚えています。

施設担当としてやってよかったことは、構内の屋外環境の整備です。海外の大学でよく見かける屋外のリラクゼーションスペースが東大には少ないと感じていました。本部のお金でベンチとテーブルを設置したのは、本郷では工学部1号館前、総合図書館前、理学部三角広場の3ヶ所（後に農学部にも）。DXの推進とともに、コロナ禍の副産物と言えるでしょう。

一方で、構成員の間に人間関係の難しさが残っていると聞きます。2020年の入学生は特に友人を作るのが難しかったはず。サークルや部活に入っていない人は特に厳しかったでしょう。私はTF座長として活動を制限する側にいたので、恨まれたでしょうね。どう収束するのかを考えながら、感染者数を見て一喜一憂する日々でした。だらだら続く気もしましたが、意外にスッと波が引いた印象です。ウイルスは変異を繰り返して弱毒化すると聞きましたが、その通りでしたね。

5類感染症への移行を受けて昨年5月にTFは実質休止状態となりました。この3月の解散のタイミングが自分の理事退任と重なったのは感慨深いです。振り返れば、コロナ禍とともに駆け抜けた4年間でした。胸を撫でおろしつつ、奮闘の記録を将来への教訓として残します。

大学の活動は止めないと決意

2020年2月、総務担当理事の福田裕穂先生が中心となってTFを立ち上げました。当時の私は工学系研究科長。4月から理事として教育、学生支援、施設、情報を担当する予定でしたが、理事に請われて3月第2週からTFに加わり、毎週月・木曜に対応を協議するようになりました。

卒業式は代表者のみの参加とし、入学式は中止に。かわりに五神真総長が動画でメッセージを発信することとしました。対面がNGでも大学の活動は一切止めないことを決め、授業の全面オンライン化を発表したのが3月末。有志の先生方が3月頭から準備を始めていましたが、新学期に間に合ったのは奇跡的でした。

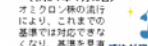
TFでは、情勢を見ながら活動制限指針を設け、4月6日にレベル2を宣言しました。ところが7日に政府が緊急事態宣言を出したため、翌日にはレベル3に変更し、授業は全面オンライン、学生の課外活動は禁止、教職員はほぼ在宅勤務に。制限が一番厳しかったのはこの頃ですが、全ての門を封鎖したのではなく、たとえば龍岡門の病院側の道はオープンでした。7月には健康管理報告サイトを設置し、

←1,255人
(2022年8月)

2024 年
(令和 6)



第79号～
(令和4年4月15日)
オミクロン株の流行により、これまでの基準では対応できな



教養教育の現場から

第63回

リベラル・アーツの風

東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学の構成員に知っておいてほしい教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

東京大学が目指す教養教育の質的転換とは？

／KOMEXシンポジウム2024「東京大学のEducational Transformation」



特任准教授
岡田晃枝
特任講師
中村長史

EX部門が企画したシンポジウム

——お題は教養教育の質的転換でした。

岡田 従来の3部門を統合して発足したEX部門の活動を発信するため、部門名を前面に出しました。3部門で担ってきた仕事を継続しつつ、1+1+1を3以上にするにはどうすべきかを考えようと思いました。以前は教養学部を中から支え、現在は外から見ると先生方を登壇者の候補に考えました。目指す教養を堅持しつつ新しいものを取り入れたらどうなるのかという問題設定です。石井先生は教養学部長時代もその後も大学の教養教育に関して重要な発言を続けていらっやいます。齋藤先生はKALS^{*}の立ち上げ時から運営委員を務め、板津先生は情報学環ですが駒場の英語部会でALESA^{*}を主導しました。アクティブラーニング(AL)などの新手法を意識しつつも教養学部が目指すものは何かを忘れない形が必要と考えました。

中村 これからを考えるためにこれまでを知る、温故知新です。パネルは概念の部分話す第1部と実際に何をやっているかを話す第2部という構成にしました。

——第1部は中村先生が司会でした。

中村 石井先生は基調講演の際、何をいつどこで教えるかという話をし、Whyには触れませんでした。これを宿題と受け止め、そこを意識した展開を心しました。岡田 何のためにやるのか、授業後に何が変わるのか、教育と社会はどうつながるのかという点まで話が繋がりましたね。

中村 それがWhyの話にもつながりました。議論で出た「身体性」の話、「型」を学ぶという話は、問いへの答えだったと思います。議論を通じて感じたのは、皆さんの表現の上手さ。齋藤先生は生成AIを「剽窃の宝庫」と言い、若杉先生は好奇心が研究を動かす様子を「宝探し」と表しました。イメージしやすい言葉を散りばめていて、教養があるとはこういうことだなと司会をしながら納得しました。

生成AIにはできないことがある

——岡田先生は第2部に登壇しました。

岡田 生成AIにできないこと、現場に身を置く意義を伝えたいと思いました。国際研修でカザフスタンに行った際、体調を崩した学生が、現地の人に助けをもらって通常とは違うルートで治療を受けることができました。現地で自分が困って初めて見える世界があります。現地の医

療制度をChatGPTに聞けばすぐ教えてくれますが、当事者として身を置いて初めて、システムの悪い部分や自分が助かる方法まで切実に考えられます。困難な環境を経験したからこそ、生成AIが示す情報をより立体的に解釈し、自分から問い直すこともできるでしょう。

——さて、教養教育の質的転換とは？

中村 手段を目的化しないことが重要だと思います。AI部門時代、AIはあくまで手段だと言ってきましたが、生成AIも同じです。何のために教育するのが大事だということは変わらないと思います。岡田 転換しないものもあるというのが全体を通してのメッセージでした。授業がZoomになっても教養教育の目的は変わりません。教養学部が狙う教養ある市民エリート育成の意義を再確認しました。

——部門発足から1年。その手応えは？

岡田 KALSの運営、初年次ゼミナールの運営など、前部門から続く業務をこなすだけでも手一杯で、新しい試みは難しいと感じます。ただ、部門の教員が日常的に顔を合わせる仕組みが整い、互いの活動が見えてきました。まだ3.5程度ですが、1+1+1=10を目指して歩みが続けます。

KOMEXシンポジウム2024プログラム
(3月15日/18号館ホール&オンライン)

開会挨拶	太田邦史(ビデオ出演)
学部長挨拶	真船文隆
教養教育高度化機構の取り組み	原 和之
基調講演③	石井洋二郎(中部大学特任教授)
基調講演④	増田 建
パネル1: これからの教養教育とEX①	石井洋二郎、板津木綿子、齋藤希史、増田 建、真船文隆、若杉桂輔 + 中村長史
パネル2: EXと実践の接続②	岡田晃枝、鹿島勲、中澤明子、宮島 謙 + 松本 悠
閉会挨拶	網野徹哉
総司会	堀まゆみ

↑EX部門のロゴ。
←シンポジウムのポスター。

教養教育高度化機構(内線:44247)



※駒場アクティブラーニングスタジオ ※文科1年生に向けた英語ライティングの必修科目



ぶらり 構内ショップの旅

第24回

カフェヴィゴレー@本郷キャンパスの巻

毎月登場する「季節のパスタ」

駒場キャンパスにあるカフェチェーン店「カフェヴィゴレー」が、4月1日、本郷キャンパスにもオープンしました。

中央食堂内にあるヴィゴレーでは、駒場と同様、イタリアの老舗ロースターブランド「illy」の豆を使用したドリップコーヒー（M¥380）やエスプレッソ（ソロ¥360）をはじめ、パスタやドリア、ケーキなどを提供しています。ランチに頼む人が多いのは、パスタメニュー。特に人気があるのが、毎月第二木曜日に登場する季節のパスタです。店長の石川和久さん



5月に新しくメニューに加わったのは「7種野菜のサラダパスタ」（¥930）。温かいペペロンチーノにたっぷりと野菜がのったヘルシーなパスタです。お店の一押しは、ほうれん草をたっぷり使った「ベーコンのほうれん草クリーム」（¥810）です。パスタに絡めたクリームソースにもほうれん草が使われていて、「他ではあまり食べられない味」だと話すのは東大駒場店から移動してきた店長の石川和久さん。他にも「博多明太子と小柱の和風」（¥870）や「茄子とベーコンのトマトソース」（¥840）など、7～8種類のパスタメニューがあり、麺はお好みで、乾麺と生パスタの2種類から選ぶことができます。

ティータイムには、illyのコーヒーと一緒にケーキをオーダーする人が多いとか。カウンターにあるショーケースにはチーズケーキやチョコレートケーキなど常時6～8種類のケーキが並んでいます。これから暑くなる季節におすすめなのが「珈琲ゼリー」（¥390）。さっぱりとした珈琲ゼリーの上にはイタリアンジェラートがのっています。「デザートも毎月新商品が出るので、楽しみにしてください」と石川さん。朝は8時から開店していて、お得なモーニングセットは12時までオーダーすることができます。 ※価格は税込



5月に新登場した、サラダ感覚で食べられる「7種野菜のサラダパスタ」。

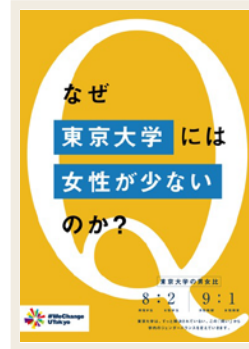
営業時間 ● 平日8時-21時
土日祝11時-19時

<https://www.italiantomato.co.jp/todaihongo/>

#WeChange Now

第7回 ジェンダー・エクイティ推進オフィス通信

「#言葉の逆風」プロジェクトが始動



2024年5月1日、ジェンダー・エクイティ推進オフィスは#WeChangeの枠組みの中で新たなプロジェクトを開始しました。その名も、#WeChange「#言葉の逆風」プロジェクト。このプロジェクトは、女性の意欲を削ぎ、

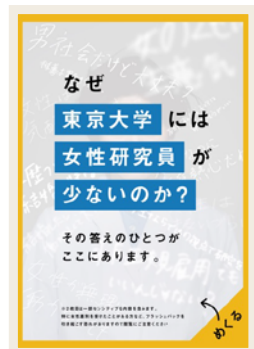
未来の可能性にまで影響を与える恐れのある言葉を「#言葉の逆風」と名づけ可視化することで、ジェンダーバイアスの是正に取り組むことを目的としています。

「女の子なんだから、地元の大学でいいでしょ」といった何気ない発言や、「男社会でけっこう大丈夫？」など、ときには思いやりに聞こえる言葉にもジェンダーバイアスは潜んでいます。こうした言葉は、幼少期から、進路選択、キャリアの選択など女性の人生のあらゆる局面に影響を与えかねません。このような言葉を、残念ながら学内構成員から言われたことがあるという声も届いています。

この現状や問題について学内構成員全員に考えていただくためにも、学内の女性が実際に受けた言葉を「#言葉の逆風」のポスターにも入れ込んでいます。また、半透明の「問いポスター」を1枚目とすることでフラッシュバックへの注意喚起を行なっております。学内でアンケートを行った際、「思い出すだけでトラウマになる」といった声があったため、このような対応を取ることにしました。当事者にとってはそれほどにつらい言葉であるということを中心に留めて、めくっていただけたらと思います。

このプロジェクトが一人でも多くの構成員の方に届き、この問題について一緒に考えていただき、学内に「追い風」が吹くことを願っています。

（特任研究員 安東明珠花）



※男女共同参画室は、2024年4月1日より、多様性包摂共創センター（IncluDE）ジェンダー・エクイティ推進オフィスに生まれ変わり、活動しています。

<https://wechange.adm.u-tokyo.ac.jp/>

ワタシのオシゴト 第216回

RELAY COLUMN

医学部・医学系研究科
財務・研究支援チーム外部資金担当

鈴木 耀

皆さんに感謝、根拠を大切に



係長ではありません、一般職員です。

令和4年4月1日、現部署に異動してきた初日に私は自席で青い顔をしていました。(当時は)正体不明の書類、引継資料に囲まれ、頭が爆発寸前。その後、チームの皆様のおかげで、皆さんのお時間をいただき

つつ、何とか今日までやってこられました。

私が所属する外部資金担当は、政府系外部資金の受入～執行(調達)～報告、所謂入り口から出口までを担当します。外部資金は執行における制約が多いため、根拠を大切にしながら仕事に邁進しております。近年、国立大学法人は経営を求められる時代ですので、外部資金を獲得することの重要性をより実感しているところです。

話は変わりますが、最近お昼休みに医学部のテニスコートで気分転換にテニスしています。定期的に身体を動かすようになってから、仕事の能率が上がったかも!?

奇しくもこの文章を執筆している令和6年4月1日、私は青い顔ではなく充実した顔をしているように思います。



数年ぶりにラケットを買いました!

得意ワザ: 絶対音感で生活音をドレミで認識出来る
自分の性格: 喉元過ぎれば熱さを忘れる
次回執筆者のご指名: 小林未佳さん
次回執筆者との関係: 現部署の元同僚
次回執筆者の紹介: 前向きかつ自身の世界感が素敵

専門知と地域をつなぐ架け橋に

FSレポート!

第31回

2023年度体験型活動ワーキンググループ座長
数理学研究科教授

石毛和弘

2023年度活動報告会を振り返って



報告会にて、自治体関係者や参加学生、教員と。

2024年3月15日、本郷キャンパスの鉄門記念講堂でフィールドスタディ型政策協働プログラム(FS)活動報告会が開催されました。この報告会では、藤井輝夫総長や津田敦理事の挨拶に続き、各グループが一年間のそれぞれの課題に対して行った活動や提案について発表しました。すべてのグループの発表が、2月のFS最終ワークショップでの活動報告と比べても、さらに磨きのかかった魅力的で説得力のあるものでした。美しい景色や美味しそうな食べ物、地域の関係者との和やかな写真など、現地活動の楽しさを伝えるスライドも多くありました。全ての発表が終わった後、体験型活動WGの座長であった私が講評を行い、江頭正人社会連携本部副部長が受入関係者への謝辞を述べ、FS活動報告会は幕を閉じました。その後、コロナ禍後初のポスターセッションが開催され、より詳細な活動報告が行われました。FS活動報告会とポスターセッションは、学生たちの情熱にあふれ、終了時にはまだ話し足りないという雰囲気が漂っていたように思います。

FSで取り組む課題は、日本の地域行政が抱える問題の縮図とも言え、人口減少や過疎化等が多くの課題の背景に見え隠れします。それぞれの課題には個々の問題の特殊性が加わり、どれも解決困難な社会的課題ばかりです。FS参加学生には自由で柔軟な発想力と積極的な参加が求められます。一年間、参加学生は現地活動やFSワークショップを経つつ、グループ間で議論を続け、それぞれの課題に対する解決への道筋を提案します。私にとっては、学生たちが学業等の合間に時間を作ってまで地域行政が抱える課題解決に挑戦しようとする姿勢と真摯な取り組みの様子を見るにつけ、ただ感心するばかりの一年間でした。また、FS活動は東京大学はもちろん、地方自治体や地域住民から多大な支援を受けており、その支援に感謝の意を表します。

現在の日本は数々の課題に直面していますが、FSプログラムに参加する学生たちの姿や成長には、日本の未来への希望を感じます。今後も、多くの方々の支援を受けながら、FS活動が持続的に発展していくことを心から願っています。

インタープリターズ・第201回 バイブル

総合文化研究科客員教授
科学技術コミュニケーション部門

青野由利

コラムの「禁止事項」

長年、新聞社でコラムを書いてきた。今でも外部ライターとして、デジタルと紙の紙面に科学コラムを掲載している。

大昔、最初にコラムを書けと言われた時には途方に暮れた。どのように、何を書けばいいのか、見当がつかなかったからだ。

そこで他の人が書いたコラムや、エッセイ集などを手当たり次第に読んだ。それで書き方がすぐに会得できるわけではないが、「この書き手はうまい」「この人はヘタクソ」という区別はつくようになった（もちろん、普段はヘタクソな人が素晴らしいものを書くことはあるし、その逆もあり）。

その後、さまざまな形式・行数のコラムを書くようになった。時には朝刊一面下段のコラムを月1程度書いていたこともある。

コラムの性格によって書き方も変わる。だが、いずれの場合も念頭においておいた自分なりの「禁止事項」があった。

「身辺雑感を書くな」「社説を書くな」である。

商品である新聞で、個人的な身辺雑感を読まれたら読者は怒るだろう。そこには、なにか新しい発見や新しい視点がなくては価値がない。

コラムとともに社説も書くようになってからは、コラムに社説を書かないように気を付けた。社説とコラムの違いを一言で表現するのはむずかしいが、明らかに別物だ。そもそも社説は社論で、個人の主張ではない。まず主張があり、それに説得力を持たせるための肉付けがいる。

もちろん、コラムにも主張はあるし、それをサポートするデータも必要だが、書き方が違う。だが、うっかりすると社説じみたコラムを書いてしまうことがあり、心の中で「ごめんなさい」と読者に謝ることもあった。

さて、このエッセイもまた、コラムの一種だ。「禁止事項」を念頭において書かねばならないはずだが、果たして……。「これは商業誌じゃないし」なんていう言い訳を自分にしているところだ。

最新著書
『脳を開けても心はなかった
正統派科学者が意識研究に
走るわけ』
(築地書館、2024年2月)



科学技術インタープリター養成プログラム

ききんのき

寄付でつくる東大の未来

第55回

社会連携本部渉外部門
シニア・ディレクター

白石郁江

「東大出身起業家」と東大をつなぐ

3月26日、「東大出身起業家の集い」を東大創業者の会と初共催しました。当日は大雨にもかかわらず、東大出身のスタートアップ創業者の方を中心に約100名の方にお集まりいただき、大変盛会となりました。

第1部のトークセッションは法文2号館で行われ、セッション1のマネックスグループ・松本大様と藤井輝夫総長（モデレータ：相原博昭理事）の対談では、松本様の東大への10億円の寄付の背景と取り組み、起業家が大学に寄付をすることの重要性などを踏まえたうえで、東大の起業家を増やす取り組み、起業の意義やリスクについてのお話がありました。セッション2ではユージェレナ・出雲充様、ミツモア・石川彩子様、まん福ホールディングス・加藤智治様（モデレータ：UT創業者の会ファンドGP伊藤豊様）により、IPO^{*}を目指すことの意義や、そのための心構えについての議論がありました。

第2部の懇親会は山上会館へ会場を移し、ホットリンク・内山幸樹様からの海外進出に関するスピーチと藤井総長の乾杯のご発声を皮切りに、会場のあちこちで盛んに情報交換やネットワーキングが行われました。懇親会で皆様とお話しして印象的だったのは、久しぶりに東大に足を踏み入れて当時の想いが蘇った、同窓の活躍は良い刺激になる、東大ともっと繋がりたい、とほころんだ彼らの顔。母校愛がないと言われがちな東大出身者の、心の奥に潜んだ愛を垣間見ることができました。

起業家の皆様が社会貢献を考えた時、東大を思い出して寄付先を選んでいただけるよう、適切な支援や情報の提供を通して、彼らとの関係を温め、強化していくことが重要だと感じました。



第1部セッション1でトークを広げる（左から）相原博昭理事、松本大様、藤井輝夫総長

東京大学基金事務局（本部渉外課）

※新規株式公開

トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles)に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル（一部省略している場合があります）
4月9日	広報室	健康な人の糞便が病人の腸の機能を回復させる＝藤本康介 道家思想の祖・荘子が残した「道は屎尿にあり」とは？＝中島隆博 下水中の遺伝子解析で感染症流行を予測する＝風間しのぶ パプアニューギニアの人が筋肉質な理由に糞便から迫る＝梅崎昌裕 江戸の循環経済を進化させる現代の下水道システム＝加藤裕之 東大の排泄関連研究(2～6)／「淡青」48号「トイレと東大」
4月9日	広報室	東大在学中に刺激を受け起業、9年で上場を果たす／Entrepreneurs 25
4月10日	本部渉外課	株式会社バッファロー様からパソコン用充電器をご寄贈いただきました
4月10日	広報室	ステレオタイプに陥らないために——「男性脳・女性脳」の言説
4月12日	未来ビジョン研究センター	グローバル・コモンズを守るための行動変革
4月12日	本部総務課	令和6年度 東京大学学部入学式を挙行、令和6年度 東京大学大学院入学式を挙行
4月15日	教育学研究科・教育学部	福知山市・伊根町と教育・研究交流連携協力協定の締結式を開催
4月16日	総合文化研究科・教養学部	「東大に女子を増やそうプロジェクト」卒業生インタビュー動画 [2] を公開しました
4月17日	本部渉外課	東京倶楽部国際交流基金設立 藤井総長が表敬訪問を行いました
4月18日	新領域創成科学研究科	「柏の葉、新たなステージへ～地域連携、社会貢献に向けて～」を開催
4月18日	生産技術研究所	生産技術研究所の教職員4名が文部科学大臣表彰を受賞
4月19日	未来ビジョン研究センター	SDGsシンポジウム2024を開催「サステナビリティ（持続性）に向けたプラネタリーヘルス」
4月22日	医学部附属病院	南學正臣教授が国際腎臓学会理事長として国際腎臓学会総会を開催
4月22日	本部渉外課	「東大出身起業家の集い」を初共催
4月22日	本部学務課	BOOST NAIS - 2024 年春入学博士課程学生募集
4月24日	総合文化研究科・教養学部	ソンマ・ヴェスヴィアーナ発掘調査プロジェクトの成果報告記者会見を開催
4月25日	先端科学技術研究センター	先端研の教員2名が令和6年度科学技術分野の文部科学大臣表彰を受賞
4月26日	先端科学技術研究センター	先端研の加藤英明教授と太田禎生准教授が第1回神戸賞を受賞
4月26日	総合文化研究科・教養学部	「駒場リベラルアーツ基金」特設サイトを公開
5月1日	本部広報課	令和6年春の紫綬褒章受章
5月1日	本部学生支援課	第76回東京大学・一橋大学対校競漕大会を開催！
5月2日	史料編纂所	史料編纂所所蔵「落合左平次道次背旗（鳥居強右衛門磔図）」の寄託
5月7日	先端科学技術研究センター	御厨貴先端研フェローが瑞宝中綬章を受章
5月7日	広報室	ヒトの体が作られるメカニズムを探求する
5月8日	本部協創課	東京大学応用資本市場研究センターによる政策提言 記者発表会
5月10日	史料編纂所	京都府立京都学・歴史館編『東寺百合文書』のフルテキスト化とDB公開

令和6年春の
紫綬褒章受章



石原一彦 名誉教授、沖大幹 教授、納富信留 教授が、令和6年春の紫綬褒章を受章しました。おめでとうございます。それぞれゆかりの深い先生が執筆した紹介記事については、全学ウェブサイトの「各賞受賞一覧」のページからご覧ください。

表紙について

東京大学アタカマ天文台（The University of Tokyo Atacama Observatory: TAO）計画は、チリ共和国・アタカマ地方にある標高5640mのチャナントール山山頂（TAO望遠鏡サイト）に口径6.5mの大型赤外線望遠鏡を建設・運用する計画です。建設作業が進んでエンクロージャを含む山頂施設が完成したことを受け、4月30日、チリの首都サンティアゴにてTAO望遠鏡サイト完成記念式典が開催されました。式典には、駐チリ日本国大使館の伊藤恭子大使、日本チリ友好議員連盟の塩谷立会長、今枝宗一郎 文部科学副大臣、五神真理 化学研究所理事長、本学の藤井輝夫 総長、林香里理事・副学長ほかの皆様が出席し、宇宙の謎に迫る画期的な望遠鏡サイトの完成を祝いました。2025年には科学観測を開始する予定です。





CLOSE UP 初代ローマ皇帝の別荘と目される建物を発見

(総合文化研究科・教養学部)



↑会見に臨む(左から)村松眞理子先生、青柳正規先生、藤井敏嗣先生。→紀元後79年の火山灰の下から出土した土器。



ソンマ・ヴェスヴィアーナ発掘調査プロジェクトでは、ヴェスヴィオ山の噴火によって埋没したローマ時代の遺跡発掘調査を2002年から行っていますが、最近の顕著な研究成果発表の記者会見を4月17日に駒場キャンパスにて開催しました。最大の成果は、ローマ帝国初代皇帝アウグストゥスの別荘である可能性が高い建物の一部を発見したことです。

ローマ時代のタキトゥスなどによる歴史書の中に、初代ローマ皇帝アウグストゥスはヴェスヴィオ山の北側に所在した父親が亡くな

ったのと同じ別荘の同じ部屋で紀元後14年に息を引き取ったとの記述がありますが、今までその所在が特定されることはありませんでした。今回、当プロジェクトが調査をつづけてきたヴェスヴィオ山北麓地帯で2世紀の広大な遺構の下に新たな建物が出土し、分析の結果、アウグストゥス帝の治世の時代には、すでに存在した建造物であるという結論を得ました。今後さらにこの建物の発掘調査を充実させるため、東京大学基金から寄付を募っています。https://utf-u-tokyo.ac.jp/project/pjt07



CLOSE UP 「落合左平次道次背旗」をゆかりの地の博物館へ寄託

(史料編纂所)



昨年のNHK大河ドラマ『どうする家康』で岡崎体育さんが演じて話題になった鳥居強右衛門がモデルです。

史料編纂所が所蔵する「落合左平次道次背旗」を大分県中津市歴史博物館へ寄託することとなりました。戦国時代から江戸時代初期頃にかけて作られた旗指物としてよく知られるものです。天正3年(1575)5月21日、武田勝頼と織田信長・徳川家康が戦った「長篠の戦」の直前、武田軍に包囲されていた徳川方の奥平氏が守る長篠城から脱出し、信長・家康の援軍が来ることを確認した、鳥居強右衛門という武士を描いたとされます。

奥平家の忠臣・鳥居強右衛門は、長篠城籠城戦の際に援軍要請の使者として派遣され、織田・徳川の援軍の約束をとりつけて城へ戻る途中、敵方の武田軍に拿捕され、磔にされました。城に向かって「援軍は来るからそれ

まで持ちこたえよ!」と叫んだ強右衛門の勇姿を、落合道次という武将が見て感銘を受け、背旗(合戦の際に自らの存在を顯示するために背負う旗)の図柄にしたと伝わっています。

この旗は史料編纂所が購入した昭和14年(1939)以前の段階で掛軸の形になっていました。しかし旗本体や周囲の裂地に傷みが見られたため、2015年度に修理を行ないました。

今回、奥平家ゆかりの中津の地で保存活用を図るべく、中津市歴史博物館に寄託されました。他機関へ本所所蔵資料を寄託するのは初めてのことです。5月11日~5月26日には中津市歴史博物館で特別公開が行われ、5月19日には史料編纂所の金子拓教授による特別展示解説も実施されました。



CLOSE UP 柏の葉の活性化を議論するシンポジウムを開催

(新領域創成科学研究科)



パネルセッションには、アルガルバイオ、アステラス製薬、柏市、国立がん研究センター、CIC Japan/CIC Toranomon、日本貿易振興機構、東大柏ベンチャープラザ、東葛テクノプラザ、Pale Blue、三井不動産よりパネリストをお招きしました。

3月25日、新領域創成科学研究科主催による2023年度第2回公開シンポジウム「柏の葉、新たなステージへ」を柏の葉カンファレンスセンターおよびオンラインによるハイブリッドにて開催しました。柏の葉エリアを中心とした地域振興、社会貢献をテーマに、スタートアップエコシステムを産業・経済へのエコシステムにつなげ、柏の葉エリアを中心とした地域を活性化していくことについて議論を行い、合計178名(会場:65名、オンライン:113名)の参加がありました。

徳永朋祥研究科長の開会挨拶の後、基調講演として、柏の葉で新技術を創生し国際的に

事業を展開するナノテック株式会社の中森秀樹代表取締役社長より「柏から世界へ 新技術発信拠点カーボンバレー構想」というタイトルでご講演いただきました。パネルセッションでは、「スタートアップのコミュニティづくり」「スタートアップ・エコシステム」「新産業創造と産業集積を目指して」という3つのテーマでディスカッションを行いました。閉会後の意見交換会では、テーマのひとつである「コミュニティづくり」の第一歩として活発な交流が行われました。本シンポジウムは三井不動産株式会社およびGreater Tokyo Biocommunityよりご後援をいただきました。



UTokyo 今年の父の日は「UTCCネクタイ」を贈りましょう!

UTCCからのお知らせ



各柄¥13,000
(税込)



東京大学オフィシャルネクタイは、東京大学スクールカラー「淡青」をイメージしたものやキャンパスを代表する樹木のイチョウをデザインしたものなど全10柄、他にはない東京大学オリジナルの上質なネクタイです。式

典や学会、就職活動などの大切なシーンにはもちろん、普段使いとしても幅広くご使用いただけます。藤井総長も入学式で着用(→)されたUTCCネクタイを、父の日のプレゼントとして贈られてはいかがでしょうか!





Decades of Work

基礎研究の成果を臨床応用するトランスレーショナル・リサーチ（TR、橋渡し研究とも呼ばれる）は2000年代半ばくらいから提唱され始めているが、アカデミア発の開発候補（シーズ）がその中心的役割を果たしている。私が米国Food and Drug Administration（FDA）での審査経験を得て医科学研究所に戻ったのは2000年である。この頃はアカデミアが臨床試験まで開発を進めることは稀であった。帰国に際し、FDAの同僚からは「なぜ製薬企業に行かないのか、給料が数倍は違うぞ」と言われ、中には紹介してやると言う者までいた。私のメンターは、アカデミア開発にも精通していたが「大学での臨床開発支援は“Decades of Work”である。研究者は容易に諦めず、また、開発に時間を要することが多い。長期間従事することに意義がある」との言葉をいただいた。

帰国して数年後に橋渡し研究拠点形成プログラムなどのTR関連事業が始まり、東京大学が橋渡し研究支援拠点に採択されるころから私のTR支援・推進業務が多忙となってきた。この間、実に多様なシーズに関わり、“a

decade”を超えるシーズがいくつか出てきている。“a decade”級の研究者に共通するのは開発に対する執念であり、「容易に諦めない」姿勢である。

私の任期中には“two decades”のシーズも出てくる。まさに“Decades of Work”となる。一方、研究費は細分化され、企業的な管理手法であるステージゲート運用の厳格化により長期間の持続した研究が難しくなっている傾向にある。また、起業による開発が奨励されるようになり、法規・ガイドラインの変更は頻繁であり、研究者の執念の結実の方法は年々大きく変化している。上記のメンターは、「この分野は、“Change is the only constant”」とも言っていた。「長期間にわたる覚悟」と「変化への順応」と合わせてTR推進の1つの解となり、研究者と共有すべき覚悟なのかと考え始めている。

長村文孝
(医科学研究所)

